



森林組合おおいがわ
すぎやま よしひで
杉山 嘉英 組合長



日本茶インストラクター
つちや ゆうこ
土屋 裕子 氏



ケーブルテクニカ(株)
りこうよう
李 厚陽 氏

第12回「未来座談会」



2月24日、「かねね四季の会」(太田起博代表)主催の未来座談会が、茶茗館にて開催された。太田代表は「今年も第一線で活躍される3人をゲストにお招きした。ぜひ良い座談会にしたい」とあいさつした。町内外から来場した約40人に向けて、3人が語った「目の前が明るくなる話」とは一。

◎土屋氏

私は尾呂久保地区に生まれて、家業の林業と茶業をずっと見ながら育ちました。マスコミの仕事に十数年間携わった後、平成14年に日本茶インストラクターの資格を取得したことをきっかけにして、お茶に関する取り組みを始めました。

当時、お茶が低迷を始めた頃だったと思います。父ができなかったことは「売ること」だったので、その部分を私なりの方法でやってきたつもりです。何よりも強かったのが、インストラクターの資格を取ったことによって、お茶の仲間のネットワークができたことです。声がかかれば全国各地でも行って、現地の方と交流をしました。つながりができたところから、さらに別の人とのつながりがどんどん広がっていくことを感じました。そのつながりは、資格を取ってから今までの、私の財産になっています。

情報化社会となった今の時代は、インターネットで簡単に人とつながることが出来ます。だからこそ、「リアル」に人とつながれる大切さを、すごく感じています。資格を取ってから今まで、家のお茶を全量小売することを目標にしてきました。この目標は達成できるようなったといっても嘘ではなく、その要因は「人と人とのつながり」によるものが大きかったと感じています。

▼来場者からのおもな質問

Q1 修学旅行誘致の提案がありました。が、定番の東京や大阪、京都に戦いを挑んでいくということですか？

A1 (李氏) 地方であっても、自然の中で他の地域では体験できないことができるのであれば、良い勉強の場になると思います。日本国内でも、まだ十分に市場が残っていると思います。

Q2 この町のポテンシャルは感じますが、個々には頑張っている方がたくさんいらっしやうと思います。ただ、なかなか「線」になり「面」にならない状況にあると思います。その要因はどこにあるのでしょうか？

A2 (土屋氏) もともと違う業種同士が一緒にやるのは、難しいことがいっぱいあると思います。私自身は、自分がここでどうありたいかを意識してやっていけば、線や面になっていくと感じています。それぞれが頑張っているもつながらないということは、あまり悲観しないでいいと感じています。

A2 (李氏) 観光が我が町にとって重要だという意識を、町民の皆さんに持つてもらいたいです。町民全体がそういう意識を持たないと観光が盛んにならないと思います。

情報というのは、自分にあつたものを選ぶための学習をしていかなければならないと思っています。都会の人は、その部分においてすごく進んでいると思います。地方で生活している人たちも、情報に振り回されることがないように、頭の中でしっかりと情報の整理ができるようになっていければいいと思います。

◎李氏

今日は、1人の外国出身者の目から見た川根本町について、話をさせていただきます。

まず、データをあげてみます。平成28年の東京都の人口は1千370万人でしたが、同じ年によそから都内を訪れた人、つまり交流人口は5億2千340万人で、定住人口の37.5倍でした。一方、同じ平成28年のデータによると、川根本町の場合は人口7千390人に対して、訪れたお客さんの人数は58万8千人でした。これは人口の80倍近くで、東京の倍以上にもなるのです。この数字は、川根本町に魅力があることの証だと思えます。

ここで、自分の考えを三つお話しさせていただきます。

◎杉山氏

今、私が取り組んでいることは、大きく分けて二つです。

ひとつは「森林認証」といって、森林を適切に管理することを広めていくというものです。山の魅力をみんなで見直していこう、そのためには、「教科書」がほしいということ、森林認証という仕組みができました。現在川

根本町には、5万ヘクタールの森林があります。所有者の協力もあり、約1千800ヘクタールが認証されています。また、この認証を島田市・藤枝

目の前が明るくなる話

市も含めた範囲まで広げる準備ができ、現時点で藤枝市を含めた約2千ヘクタールの認証ができました。

二つ目は「木の駅かねね」事業です。約75名の方が仲間に入って、東海フォレストにチップ材料として出荷しています。今まで山に関係のなかったこれだけの方が、山に対して関心を持ってきたというのは、大きな成果だと思います。

また、昭和30年代に植えられた木が大きくなっていますので、切ってしまうという技術を身につけて、地域全体でそれを生かすという仕組みを持つていけば、林業は地域を支える産業になり得ると思います。今までは間伐だけでしたので、大きな機械で、数人で管理ができました。これから木を切って、植えて、下刈りするという循環型林業に入っていきますので、大勢の人に関わってもらわなければなりません。これからも一度、森林が人を雇用する力を持つようになっています。

今後この地域を支えるのは、「交流人口の増大」と「お茶と森林の産業」だと思っています。林業や茶業と、それらの産業やここでの暮らしを体験できるエコツーリズムが、連携していくこと。そして、ここに住んでいる人たちが、「自分たちはすごい資源の中にあるのだ」という自信と誇り、「前に向かっていく」という気持ちを持ち続けられ、十分やっていけると思っています。